

2023 年度春学期教員アンケートの結果について

FD・SD 委員会

目次

1. 回答者数と回収率	1
2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか	2
3. 学生の集中や理解を促す取り組み	3
4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況.....	4
5. 今後の改善計画	5
6. 特別な配慮が必要な学生への対応.....	6

1. 回答者数と回収率

2023 年度春学期の教員アンケートの回収率は、28.8% (対象者 340 名のうち 98 名)であった。専任教員のアンケート回収率は、42.2% (対象者 154 名のうち 65 名)であった。また、非常勤講師のアンケート回収率は 17.7% (対象者 186 名のうち 33 名)であった(表1)。

表1 区分別の回答者数と回収率

区分	回答者	対象者に占める回答者の割合
専任教員	65名	42.2%
非常勤講師	33名	17.7%
全体	98名	28.8%

前年度同学期の教員アンケートには 128 名が回答していた。本学の教員の数はいくつか減ってはいるから、98 名しか回答が得られなかったのは、単純にアンケートに回答してくれる教員が減ったからだと考えられる。なお、異なる年度の同学期の比較においては、本年度の回答者数は、過去 5 年度で最低であった(表2)。

表2 年度・学期別の回答者数

	春学期	秋学期
2019年度	142名	127名
2020年度	149名	107名
2021年度	144名	115名
2022年度	128名	88名
2023年度	98名	—

また、学部別に専任教員のアンケート回収率を見ると、今年度はいずれの学部でも 5 割に満たなかった(表3)。

表3 学部別の回答者数・回収率(専任教員)

	回答者	専任教員	回収率
経済学部	16名	37名	43.2%
社会学部	12名	27名	44.4%
流通情報学部	10名	23名	43.5%
法学部	11名	28名	39.3%
スポーツ健康科学部	15名	39名	38.5%

*回答者(専任教員)の中に所属学部を答えなかった者が1名いた。この者は上記の表に含まれていない。

2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか

・「学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか」という質問に対して、98名の回答者のうち74名(75.5%)が、「とても役立っている」あるいは「概ね役立っている」と回答した。コロナ禍でオンライン授業の科目が多かった(したがって、学生の状況を教員が把握しにくかった)2020年度から2022年度までの間は、授業アンケートが重要な情報源であった。しかし、ほとんどの科目において対面授業が再開された本年度は、教員と学生が直接コミュニケーションをとる機会が飛躍的に増えた。授業アンケートが「とても役立っている」あるいは「概ね役立っている」と回答した者の割合が減ったのは、このような変化を反映しているのかもしれない。

表4 振り返りに役立っていると回答した者の割合

	春学期	秋学期
2019年度	71.8%	70.1%
2020年度	82.5%	80.4%
2021年度	78.5%	81.7%
2022年度	81.3%	73.8%
2023年度	75.5%	—

(1) 抜粋—肯定的な回答

「自分ではわかりにくい改善点について気付かされる。」「無記名なので本音の回答に近い。」

「担当する講義科目がオンデマンド授業になっているため、授業期間中は講義に対する学生の反応が分からない。そのため、学生アンケートが授業の振り返りに役立つ。」

「学生がどれくらい家庭学習に時間を割いているかがわかる。」

「授業のレベルが学生に合っているか確認するのに役立っている。毎回の授業で実施している小テストなどでも確認しているが、アンケートでの確認も有用である。」

「自由記述への回答から、受講生の要求がわかります。また、担当科目についての集計結果を、大学全体の結果と比較できます。」

(2) 抜粋—否定的な回答

「授業後に毎回独自のアンケートを行っており、授業アンケートよりもそちらをより重視している。」

「私は、学生に向けて積極的に調査依頼を呼び掛けていない。無関心な学生の記載が紛れ込んでくるからで、それを抜きにした積極的に講義に向き合う学生の回答から反省点を見出したいからである。」「回答数が少ない。」「回収率が低い。」

「匿名ゆえに無責任な発言がなされることがある。根拠のない誹謗中傷に類する発言は、学生から教員に対するハラスメントに該当することもあり得る。こうした発言によって傷つく教員がいないとはとても考えづらい。フォローアップなりケアなりを考える段階に来ているのではないか。」

(3) 改善提案

「自由記述欄をさらに充実させるべきだと思います。学生の本当の声が聞けるからです。」

「教員側の働きかけについて問う項目だけではなく、学生側が自身の学習をどう自覚しているのかが把握できる項目（出席回数や、どのくらい積極的に授業に取り組んでいたのかななどを問う項目）を追加していただくと、授業の改善に繋げやすい。」

3. 学生の集中や理解を促す取り組み

「新型コロナウイルス感染症対策の緩和にともない、ペアワークやグループワークの機会を増やした。これらの取り組みが授業参加度・満足度や内容理解度における良い評価につながったように思う。」

「語学の授業において、なるべく学生同士のペアワークを行うようにした。自由記述の質問への回答から、学生はペアワークを楽しんでいることがわかった。」

「早く完成した学生のレポートを紹介することで、作業中の学生のヒントになるようにした。完成できそうにないと感じていた学生にとって、ロールモデルがゼミメンバーという状況になり、手が届きそうな雰囲気づくりを心掛けた。まだ進行中なので学生からのフィードバックはないが、レポートの提出状況などからそれなりの手ごたえを感じている。」

「補助学習用の動画で、実技の内容をくり返し見られるようにした。」

「授業を進めるにあたって、規範を学生たちに作ってもらっています。1年生なのでなかなか難しいのですが、少なくとも一部の学生はこちらの意図を理解して取り組んでくれたと思います。」

「大人数の授業でも学生に語り掛け、対話することを実践しています。適度な緊張感が学生の集中度を高めていると感じています。」

「外国語の授業で、その国の文化や慣習などを、映像資料を用いて説明した。学生からは、視覚資料を使うことで興味が深まったというフィードバックがあった。」

「授業内容にメリハリをつけた。例えば、＜講義→動画→講義＞、＜講義→ワーク→講義＞等。」

「反転授業方式をとった。manaba を使って授業内容の概要説明を動画等で実施した。学生はこれを視聴したうえで授業に参加する。学生は、あらかじめ各回の目的や疑問点などを把握して授業に臨んでくれたと思う。」

4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況

「語学の授業では、ペアワークを用いて、学生同士がコミュニケーションをとるように実践している。その結果、学生が積極的に発話するようになった。また、テキストの内容について、動画などを見ながら考える授業を行っているが、学生が積極的に意見を語ってくれた。」

「教科書を持ってこない学生が毎回いるので、そもそも教科書を持っているのかを必ず確認することにした。また、教科書を買っていない場合は授業に参加できていないのと同じことなので、単位は出せないとシラバスに明記した。その結果、教科書を持たずに参加する学生は以前よりも減った。」

「興味・関心を引き出し、実践的な学びの機会を提供するために、事例紹介などの頻度を増やした。その結果、レポートなど学生の成果物の質が向上した。」

「去年は、グループディスカッションを各年次のゼミに導入することに力を入れました。毎週取り入れるのはあまり現実的ではなく、一部の学生はすぐに飽きてしまうことと、活躍する学生とそうでない学生が二分されていて、意欲の低い学生への対応問題が残りました。今年度は全員毎週小テストを受けること、その中にディスカッション問題を入れること、回答期間は 1 週間と設定したことで、議論のテーマについて考える余裕を与え、参加意欲・学習意欲を高めるようにやり方を修正しました。今のところ、学生の回答率は平均 7~8 割です。」

「学生同士のグループワークを、授業回数の 3 分の 2 以上でおこなった。全体として、学生が自らの意見を交わす場面が見られ、一方的な授業にならなかったという印象を持っている。」

「中間期のアンケートにおいて、授業の進行速度に対する不満が多かったので、授業をなるべく区切り、要所要所で時間をとり、理解度の確認をしながら進行するようにした。」

「授業のペースが速いとの指摘が以前からあったが、講義の内容や順序を整理することで、ややゆっくりと進めることができたように思う。板書の読みにくさについては、提示する内容等をスライドに組み込むことで改善されたように思う。」

「今年度は、教科書の英文の難易度を下げた教科書を使用しました。受講生にとって、取り組み易くなったと感じています。」

「昨年度は授業アンケートに回答してくれる者が少なかったため、リアクションペーパーを複数回配布して感想等の聴取に取り組んだ。」

5. 今後の改善計画

「語学の授業でうまくいったペアワークを 1 年演習でも取り入れて、学生が積極的に意見交換をする環境を作りたい。」

「受講生のレベルに合わせて授業をしています。難しすぎず、でも学ぶことがあったと実感できるように、受講生のレベルを見極めます。また、教師と学生のやりとりだけではなく、学生同士が話し合えるような時間を取りたいと思っています(ピア活動)。」

「授業アンケートの回答率の上昇を目指すとともに、リアクションペーパーの配布なども継続し、受講生の声に耳を傾けるようにしたい。」

「manaba を使って、補助教材の動画を自由に見られる工夫を継続したい。また、動画の内容もブラッシュアップしていきたい。」

「プロジェクト学習については、グループに分ける前に、いかに交流やディスカッションを深められるかが要(かなめ)になると思いました。今後、グループワークのテーマをもう少し増やせるように検討したいと思います。授業アンケートの回答に、「この授業の魅力的な点は先生が指定した場所ではなく、気に入った場所について調べられるということです」というコメントがあったので、課題のテーマをグループで決める方針は継続していきたいです。」

「前回は、プロジェクト学習の進め方について記述しました。今年度は、受講生の数が減ってしまい、ある程度の人数がいないと活気にならないことを再認識しました。また、グループ内でモチベーションの差がはっきり出てしまったように思いました。」

「今年度は、合同ゼミに極力参加した。また、学内のセンター等が行っている活動に参加するように呼びかけが多くあったので、例年よりもそうした活動に多く参加したつもりだ。その結果、ゼミ独自の特色的な活動の時間が減ってしまい、連続性もそがれてしまったので、1 年生には印象が薄くなってしまったように思う。学期全体の流れやイベント・活動のつながりについて、もっと考慮して構成しなければならぬと思う。」

“I am planning to focus on fostering students' autonomy and implementing cooperative and collaborative classroom activities which I learned at KUIS MA TESOL Program“

*TESOLとは「Teaching English to Speakers of Other Languages」の略語であり、英語以外の言語を母語とする人たちへ向けた英語教授法のことである。

6. 特別な配慮が必要な学生への対応

(1) 精神的・身体的な障がいをもつ者への対応

「障がいのある学生に対しては、それぞれの障がいの特徴があるため、学生と教務課の意向を取り入れ、学生の話聞き、取り組むようにしている。」

「合理的配慮の必要がある学生のために、その者だけを受講生とする manaba のコースを設置した。当該学生の体調に合わせて課題の提出が出来るように、締め切り期限の柔軟な設置などの対応を行った。また、当該学生への対応については、ダイバーシティ共創センターの相談員の方に確認した。相談員の方からも授業方法等について本人へ伝えてもらった。残念ながら、実際には当該学生は一度も課題を提出しなかった。」

「文字を手書きするのが困難な学生がいた。リアクションペーパーは、他の学生には手書きで提出させているが、この学生には電子的な提出を認めた。」

「授業課題や期末レポートの提出締切を延長する、欠席した場合は、代替課題に取り組んでもらい、その提出をもって出席にカウントするなどの対応を行なった。」

(2) 留学生への対応

「留学生で日本語による説明の理解に時間がかかるゼミ生がいるので、板書して読み仮名をふるなどしてスピードを意図的に落としている。これにより、日本人の学生も考える時間をじっくり取れるようになってきていると思う。」

「学習へのモチベーションが低い学生や、精神的な問題が原因で発表ができないなど、メンタル面で問題を抱える留学生が増えている。学生の連続欠席や学習上の問題があるたびに、国際交流課のスタッフに相談し、学生に連絡を取ってもらい対応を検討している。関連科目の教員とも連携し、情報共有を行なっている。」

「留学生達は日本の生活や本学での授業で様々な刺激を受けながら学んでおり、興味深い内容を日本語力が弱いながらもアウトプットしている。担当科目では、受講生の表現の不十分さを整えな

がら、まずは学生との信頼関係を築くようにした。彼らの気づきを尊重し、グローバル、ユニバーサルな視点から主体的で対話的な授業を展開する余地はまだある。」

以上